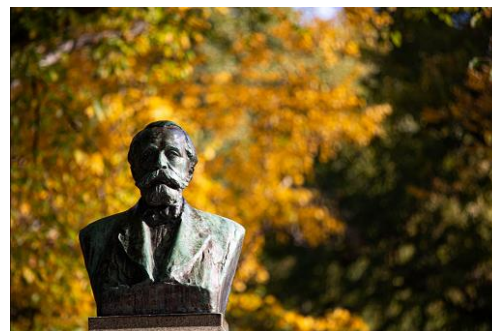


真剣な学びの場 ～ 丁寧な大局観 ～

順天堂大学 名誉教授
新渡戸稲造記念センター長
恵泉女学園 理事長
一般社団法人 がん哲学外来 理事長
明日を考える会 会長 樋野興夫



最近、『病理学』の授業の機会が与えられた。『病理学』は、「森を見て木の皮まで見る」事であり、マクロからミクロまでの手順を踏んだ「丁寧な大局観」を獲得する「厳粛な訓練」の場でもある。『病理学』の授業の「目的」は、「支える&寄り添う」、「会話&対話」の違いの「真剣な学びの場」の提供でもある。



「コロナ時代の病理学」の重要性を痛感する日々である。私の生涯に強い印象を与えたひとつの言葉がある。「ボーイズ・ビー・アンビシャス」(boys be ambitious)である。札幌農学校を率いたウィリアム・クラーク(1826～1886)が、その地を去るに臨んで、馬上から学生に向か

って叫んだと伝えられている言葉である。

もちろん、当時の私はクラークの事も札幌農学校の事も知らず、クラーク精神が内村鑑三(1861～1930)、新渡戸稲造(1862-1933)という、後に私の尊敬する2人を生んだ事も知らぬまま、ただ小学校の卒業式で、来賓の言った言葉の響きが胸に染み入り、ぽっと希望が灯るような思いであったものである。これが私の原点であり、そして医学生、病理医師時代の読書遍歴は、内村鑑三・新渡戸稲造・南原繁(1889～1974)・矢内原忠雄(1893～1961)の著書となった。思えば、「人生邂逅」の「非連続の連続性」であった。

まさに「すべてのことを働かせて益としてくださることを、私たちは知っています」(ローマ人への手紙 8章 28節)の体験である。

『多様性と対話』

栄光カフェ小岩(開設準備中) 野口信博

樋野動物園のテーマは「個性と多様性」。東京五輪のテーマも「多様性」でした。開会式では、最終聖火ランナーを大阪なおみ選手にしたことに対して、多様なバックグラウンドを持つ人への多様な意見が起きました。

メディカルカフェには、がん当事者、当事者の中でも、今まさに治療中の方や寛解の方、そして、ご家族、ご遺族、がんと全く関係のない人も集っています。クリスチャンやそうでない人もいて、色々な人が集って対話をしています。メディカルカフェの様な、多様な他者との対話の中では、「私もそう思う！」などと軽々しく口にする事が憚られるほどの厳粛な言葉に接し、他者の深みに触れさせてもらうことがあります。また、勝手に涙が出る自分や、暗かった表情の方が笑顔になっているのを見て喜ぶ自分を知り、「こういうことで

私の心は震えるのか」と新しい自分と出会うこともあります。

多様性の中での対話で、自分とは異なる 他者を知ったり、他者との相互作用の中で自分自身が 知らず知らず 成長を促され、「これが私だ」と思っていた「私」を超え出たり、そのような関わりの中で お互いを高め合う 相互生成的な 営みを経験します。

多様性の 少ない対話の場では、他者を知りながら 新しい自己に出会うということは 起こりにくいかもかもしれません。そうすると、多様性の中の対話は、ソクラテスの「無知の知」、あるいは「何も知らない弱い私」を自覚する場でもあり、学びの場であり、成長の場であるかもしれません。メディカルカフェは、これからの多様性の社会をどう生きるかのヒントが隠されていると思います。



明日を
考える
ヒント

「苦しみのない人生はないが、幸せはすぐ隣にある。」 (小澤竹俊)

「大丈夫。心配するな。なんとかなる。」 (一休宗純)